
トリップ先配達人

SkyFrider

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリップ先配達人

【Nコード】

N1433W

【作者名】

SkyFrid er

【あらすじ】

日本でたくさんさんの神隠しがおこる現在。ある日、うちの兄もトリップしてました。その次には友達まで神隠しにあったことで、兄の世界の人に協力してもらいー配達人、というものになったのです、あたし。

日本からのトリッパーのために、いろんな異世界へ家族からの手紙や送り物を届ける仕事。のんびりとはいえない異世界間の配達ライフのなかで、トラブルに巻き込まれたくないのに巻き込まれる物語。逆ハーを目指してます！

配達人と門番さん

春の日射しが強くなった。

もうすぐ姫の考案した「プーるびらき」なるものもおこなわれると、城勤めの期待も高まっている。

ああ、平和だ。

門番はおおきくあくびをした。荘厳な城の前とはいえ、活気と根性のある商人たちが露店を出しているため、大勢の人でにぎわっている。

姫が来てから天気が荒れることもないし平和になったし、騎士には悪いがこの方が自分には合っている。

平和ばんざい、無駄に筋肉のついた身体がビール腹にるのも時間の問題だろう。

ま、俺はそんなおっさんにはならないけど。だって腹は…。

…やっぱり、久しぶりに訓練所でもいくか。これは…やばい！

いつのまにかやわらかなものがズボンの上にのってる。ぷにぷにしている！

己の腹事情に衝撃を受けた門番はがっくりと座りこんだ。

「あの、すいません」

細い声が聞こえた。のろのろと足元をみると、見慣れない靴と細く白い脚。

「聞こえますか？」

「あ、悪い。城になんの用だ？」

よっこいせ、と立ちあがった門番は。

ありえないもんみちまった？

という顔をした。黒く柔らかな素材でできた上の服に、同じく黒い素材でできた細身の下服。

深く被られた帽子から零れるのは、…姫の証であった黒髪。

「ひ、姫？何をなさってー」

「お姫様への配達に来ました。姫の母上からの贈りものでございます。」

姫には水速、と伝えていただければわかるとおもいますが」
姫ではない。

少女らしい唇が、柔らかに言葉を紡ぐ。

姫よりも黒を深めたような瞳がまっすぐ自分を見上げる。

それを、今はただ信じられない気持ちで見つめるしかなかった。

現在

ここはまだ春の季節なのか。

日本ではもうセミの鳴き声が減ってきてるのに。

相も変わらず荘厳な扉の前に、呼び鈴を軽く鳴らして一步下がる。
髪を簡単に後ろでまとめ、騎士の制服みたいな格好で城の中をうろつくのはやっぱり浮くんだろうか。

新米らしきメイドさんがぼかんと口をあけて固まっているのには：なんかもう慣れた。

「誰だ。姫への用件と名を述べよ」
扉越しのくぐもった声が低く問う。

「ニトリです。宅配に伺いましたー」

「なんだお前か。久しぶりだな」

少し扉が開くと、中から30代前半の男が軽く笑って出てきた。

引き締まったからだと黒く焼けた肌をみると、最初に会ったときから結構立つのかと思わせる。

なんせ門番は体格が良かったもので。

そんな門番から姫付きのイケメン護衛にまで昇進したというのに、妙に庶民らしい気安さが抜けていない。平和ボケとまでは行かずとも、のんびりした笑顔はほのぼのしそうだ。

自分の横にどんと置いている妙に大きい茶色の箱を見て、納得したように男が頷いた。

「また姫さん、お前に会うために…」

「この世界には小さいものが魔術使で届けられるようになりましたから。」

私も久しぶりに夏緒に会いたかったので、別にいいんですけど――

「せつき――――っ!!」

「ぐおっ…う…」

どんばんがしゃん。ぱきーんどっぼーん。

というなんとも不吉な音と共に、フワフワした癖毛の黒い塊が飛びついてきた。なんだか護衛がかわいそうなことになってる気が。

「ま、いっか。毎回だし」

倒される方が悪い。世の中に真実だろう、うん。

別に自分のせいで城の修繕費がかさむわけじゃあるまいし。

「会いたかったよ瀬月！」

「はいはい、私も。久しぶり」

この世界にきてから一回り小さくなった——というか、子供の頃に体だけ若返ってしまったという咲も順調に成長しているらしい。ぎゅうつと抱きしめあうと、もうだいぶ背が伸びたのだと肩の位置でわかる。

私欲で言えばもう少し可愛いままできてほしい気がする。

「あ、注文したのは？」

「持ってきたよ、ほら」

現にぱつと顔を輝かせてぱたぱたと荷物に駆け寄る姿を、いつのまにか見知ったメイドさんや騎士隊の人とか宰相とか隊長とか王様とか…えー…。まあつまり善良な人々と変態さんもとい、ロリコンさんが幸せそうに見つめていらっしやる。どっからわいてきたんだ。

「こんど人間用ゴキブリホイ○イでもサービスしてあげよっかな」

どうやら異世界の王道を一直線に突っ切っているらしい。我が友達。

「これこれ。ニトリのっていいよねー。安くて機能的で」

「そーゆーのホント好きだよねえ」

頼まれていた配達はソファ―だった。

…重かったんだよ！それ。

わざわざニトリに注文して、家の中で転移陣まで運んでようやくトリップ出来るんだから。

しかし家具の広告が積まれていた彼女の部屋をみて、友達の苦労は家具への執着心の前に敗北するのだと理解した。

「メイドイン地球最高！また研究にもってこうかな」

うれしそうにくりくりとした目を閉じて荷物に頬ずりしている咲を横目に時計を見ると、そろそろ夕方の5時ぐらいになっていた。

「ごめん。咲、はんこと料金」

「はい」

予め渡してある配達票と「こちら側」のお金を渡される。

「きょうもお兄さんに会いにくくの？」

「うん。面倒だけど、メンテナンスとかあるし」

「頑張れー」

「そっちなね。護衛よろしく」

手を下にかざして転移陣を刻む。

「配達完了」

ふっと目の前がゆらぎ、慣れためまいを感じる。

瞬きをしてついた場所は、そもそもこんなことになる原因となった場所だった。

日本とトリップ事情

日本。それは高度な技術だけを頼りに世界で生き延び、危うい均衡の中でも平和に生活している国。だったはずなのだが――。

古来より、『神隠し』と呼ばれるものが世界各地には存在する。

ある日突然子供がいなくなり、帰ってこない等の話は殆どの人が知っている。

とはいえ、それが本当かどうかは分からないし、信じていない人のほうがもちろん多かった。そう、多かったのだ。ある時まで。

何ら変わらない生活の中で、まず高校生が何十人か消えた。

それより遅れて、OLがだんだん消えた。

さらに、小学生や主婦まで、少数ではあるが突然いなくなった。

もちろんそれはニュースとなって報道され、『神隠し』の多発として多くの関心を集めた。外国でも似たような場合はいくつかあったが、近年でそれが飛び抜けているのは日本のみ。政府は外国による拉致という方針で調査を始めたが、全く見当違いだった。

更に何年、何日という月日がたってからまた突然現れる者も現れ、彫りの深い美形や明らかに髪と瞳の色、着ている服がおかしい人が目撃されるようになり、ついにはモノが浮いていたなどという常識では考えられないような情報まで寄せられた。

すると、少しずつネットでこう囁かれるようになったのだ。

不確かではあるが、確かにケース、パターンとしては一致する説。

そう――「トリップしたからではないか」という、荒唐無稽な意見が。

爆発的にその説は人々に浸透していき、帰ってきた人・当然消えた人をトリッパーと呼ぶようになった。番組で特集が組まれ、今日いなくなったと思われる人物、帰ってきた人物をリストにして放送するバラエティまで出るように。

だんだんと増えていく消失者や目撃情報、こうした事案について政府は耐え切れなくなり――。

キレた。

外国にはあくまで否定する姿勢を取りながらも、人間が世界間で消える際に起こる反応を科学的に研究するよう指示を出し、トリッパしたことがわかる機械の開発を求めた。

今までの消失者、帰還者を大々的に公表し、どこからか現れる異質な外国人達の調査、有害ではないかの観察も行い、つまりは全面的に「トリップ」という者を認めてしまう姿勢に入っただの。そしてそのトリップラッシュが未だ続いている現在。

日本はカオスである。いやホントに。

私、水速瀬月の家は私が13歳、つまり中学1年生になるまでは極めて珍しいことに誰もトリッパーではなかった。私も高校1年生で

ある兄も若干つまらなそうにしながら学校に通う毎日。もちろん、教室で交わされる会話はトリップのことばかりだ。

「さよーなら」

「さよーおなら」

「ふるーいっ。つーかきもっ」

「そんな事ゆうなって…あ、ごめん召喚かけられたわ」

「いってらー」

「おう。やだなー、勇者の愚痴聞くの疲れんのに――」

騒がしいクラスの中で、一際目立つ女子グループの話題も。

「ねえ、今日もレミスさん見かけたんだけどお」

「レミスって、あの銀髪に青い目の人だよね」

「え、マジで！？いいなー、あたしもう一ヶ月近くシュナードさんに会えてない」

「また木村さんと喧嘩したんじゃない？」

「溺愛してたからねえ。まあ仲直りを待つしかないって」

「三田、そんな事言って自分は今週もあっちの世界で美形とウハウハ生活でしょ。ずるい」

「あんなの美形じゃないって。ただのうざい男。親は会わせろってうるさいし」

「またまたあ」

「聞いて！？由奈トリップしちゃったみたい…。死んでないかな」

「心配してもしようがないよ。絶対生き残ってるって」

「うわあああんっゆなっ」

黒板には生徒の電子名簿があって、異世界にいるかを着用が義務の機械で○？で表示されている。もちろん私は全部○なので、異世界へ行ってエスケープしたくともできない。…ちっ。

最近ではトリッパーのための特別措置も設けられ、「トリップしても授業についていける！」などと書かれた進なんとかゼミのビラがポストによく入る始末。新たな事業展開のため、今日も業者はたくさんまし。自分にゃ関係ないけど。

「あーヒマ……。本屋にでも行ってなんか読むか」

「お、いいね。あたしも行こっかな」

「私もー」

他人のトリップ事情を堪能すると、自分と仲のいい「トリップしてない仲間」、略して「となか」（微妙に略せてない）と共にがたがたと席を立てて連れ立って教室をでる。

暑さもだいぶ薄れ、やっと過ぎやすくなった季節、チラホラと舞う落ち葉を叩き落としながら寄り道をしに行く。

これが毎日だったんだけど。なあ。

.....

「ただいまー」

狭い玄関のドアを乱暴にバタツと開けると、居間へアイスを調達しに行こうとそのままのろろと歩く。アイスは夏休みから一日一本と決めて太らないようにしようと涙ぐましい努力をしている。兄に昨日「太ってトリップできなくなるぞ」と言われたので、兄の部屋にあった筋トレグッズを捨てに行こうと画策している。けっ。いくら筋トレしたって絶対トリップできないもんねあんな奴。

「あれ、帰ってないのかね」

冷蔵庫からお気に入りの棒アイスをちゃんと一本取り出すと、ちまちまと食べながら家が静かなことに気がついた。大体部屋で『異世

『界恋愛物語』なんていうギャルゲーをしては「こんな異世界に行きてえ！」と悶える変態もとい血のつながりの上では兄という不本意すぎる人物の声が聞こえないというのは大変珍しいことだ。

首をかしげながら、いつか踏み抜かれるんじゃないかと心配になる階段をぎしぎしと登る。おかしいなあ。ギャルゲのしすぎで倒れたんじゃないだろうか。

「…あ。ちょうどいいじゃん。筋トレグッズ今なら拝借し放題。やつほー」

罪悪感もなくなためらいなくドアを開けると――

「おじゃましました」

ボタンと閉めた。

「ま、待て！ いや、誤解だ、なんか突然現れていきなりこいつが」狭い一部屋に男女が二人、しかも押し倒されているという場面が兄だった時、ゲーム廃人から逃れたのを喜ぶべきなのだろう。多分。あれ？ 兄の上にいたの、なんかがっしりとしたカッコいい感じの男の人だった気がするんだけど。おかしいな。見間違ひかな。うん、そうだよな。まさか――

「マジで！？ トリップしたさに男に体を売ろうとしてるの！？」

「ちがああああう！！！」

おそろおそろもう一回狭い部屋を覗き込むと、残念な光景だった。

「残念じゃねえよ！ 襲われそうな俺みて残念とか思うなよ！」

「あのーどちら様ですか？」

「ご主人様をお迎えに上がりました」

にこり爽やかスマイルで微笑まれ、ついどーもと会釈を返した。

褐色の肌と筋肉がよく似合う、スポーツマンとしては最適なイケメンだ。

ついでに、兄に軽蔑の視線を送る。

「そっちの趣味もあったんだー。へえー。男侍らせたかったの？」

「違う、違うんだ！ つーか普通に会釈すんじゃないやねえよ！」

「いいのよ、私、兄のことは諦めてるから、どうぞ二人で励んでくださいな」

「ありがとうございます」

「会話すんな——————！つーかいいかげん気づいてよ！俺トリップさせられようとしてんの！まだゲームの途中なのにい！迎えが男なんてやだー！」

「……どうぞ、私が母と父に伝えておきますので。ちゃんと生き延びてね。帰れたかったら自分で方法探してね」

にこにこわらって手を振ってあげたのに、この期に及んでゲームとかほざいてる兄が必死な形相で足首を掴んできた。必死過ぎてこわい。きもい。

いいじゃん憧れのトリップじゃん。襲われようとしてるけど。

部屋の外に出ようとするも、なかなか放さねえこいつ！

「変態！妹に手を出すなんてっ」

「出さないというか俺が出される側になろうとしてるんだけど！」

「知らないよ！」

二人でぎゃあぎゃあ騒いでいたから、気づけなかったのだ。

イケメンゲイさんが、のんびりと時計をみて呟いたことに。

「そろそろ時間ですね。行きますか」

途端、床があったはずの所が突然暗くなり。

下へと落下した。

「「ぎゃー！」」

「大丈夫ですよ、すぐ着きます」

「兄のせいで私までいくはめに！」

「トリップできるんだからいいだろう！」

「私だって読みたい本がまだまだあったのにーっ」

まさかの兄に巻き込まれてトリップ。

くそう、帰ったら絶対こいつのゲーム捨ててやる！

日本とトリップ事情（後書き）

遅くなりました。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1433w/>

トリップ先配達人

2011年10月6日19時26分発行